Vol.10 May,2004

【特集】青い大陸よ永遠に

【環境リポート】

長野県佐久市

愛知県・三河サミット

AQUA

水と緑と暮らしのネットワーク・マガジン

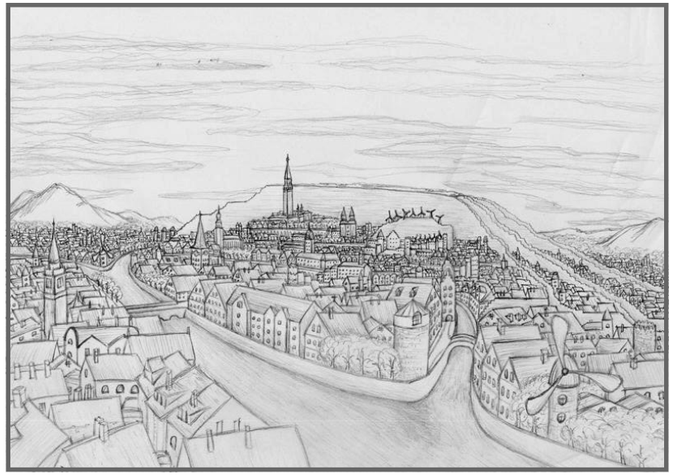


Illustration : Hayuru

目　次

【特集・エコロな話】　4
青い大陸よ永遠に
【地域政策リポート】　12
棲み分け方式で水環境保全
【名曲の泉】　15
交響詩「魔法使いの弟子」
【エッセイ】　16 17
天然もの・養殖もの
【環境列島北南】　24
仏都の伏流水
【水のある風景】
【プラネット最新情報】　26
ＪＹＯＫＡＳＯセミナー
【データファイル】　28
環境ビジネスの市場予測
【ＢＯＯＫ】　30
【サークル最前線】　31
三河湾浄化オール三河サミット
【コラム】　34
宇宙飛行士は見た
【水の贈り物】　35

アクアプラネット研究会の基本理念

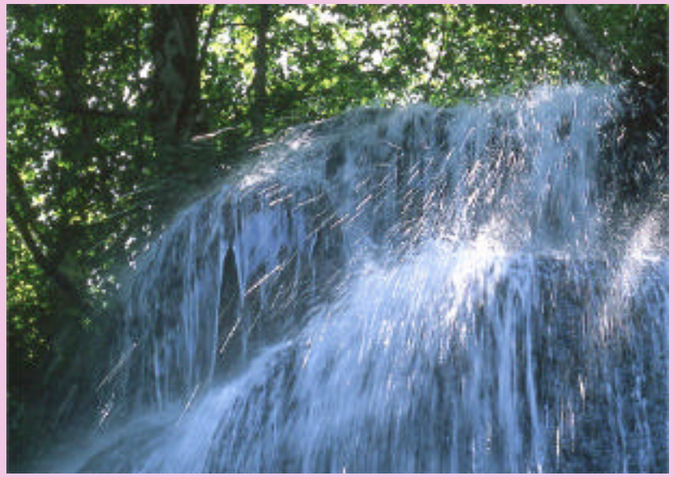
家庭から排出されるごみ、雑排水、及びし尿を「生活廃棄物」として一体的にとらえ、これらが及ぼす水や土壌などへの環境負荷を軽減させるため、住民、行政、企業、研究機関がそれぞれの役割分担のもとに協力し、環境にやさしいライフスタイルの普及を図るとともに、ローインパクト・ローコストな新技術の開発及び環境保全事業の効率・効果的・安定・公正な提供と、快適な環境を確保するための循環型・保全型社会の実現を目指す。

カバー写真
表：「男衾村 - 復興計画」提供
裏：知床のカラフトマス
（澤谷信康さん撮影）

水のある風景

虹架かる放水路（札幌市・黒川正一）＝上右
鱒見の滝（札幌市・鈴木武二）＝下左
以上、北海道ＮＰＭ会員

かささぎの家（所沢市・上野康一さん）＝下右
蔵の街の湧水（東京都・星野はるかさん）＝上左



青い大陸よ永遠に

ダイビング・ナチュラリスト、水中写真家

澤谷信康さんの「エコロな話」

ニューカレドニアの海中散歩

映画で出会った異次元の虜に

というアメリカのシリーズドラマがありましたが、ご覧になってましたか？

「ええ、見てましたよ。日本ではスキューバダイビングなんて、ほとんどなじみがない時代でした。私は小学校3年生くらいから、母の実家のある寿都という町の日本海で泳いだり、潜ったりしてました。素潜りですから、海底のウニやアワビを目当てにまっしぐらに潜っては、とって返して水面に顔を出す。当時は海は豊かですし、都会の海水浴客であふれるということもなかったから、子供のウニ採りは大目に見られてました。ともかく、水中では下か上しか見る余裕はないのですが、ネルソンは水中で自由に動き回り、悪漢と格闘したりする。アクアラングというすごい道具があることに、驚いたものです」

―それでネルソンみたいになりたいと…。

「それもあったかも知れませんが、なんといっても高校生のときに映画館で見た『青の海底探査を記録したドキュメンタリーなんですが、美しい花を咲かせたようなソフトコーラルとか、見たこともないさまざまな生き物が登場し、水中の世界にすっかり魅了されてしまいました」

■**コーラル**（珊瑚・サンゴ）　サンゴはイソギンチャクの仲間の腔腸動物で、小さなポリプと呼ばれる微生物の集合体。日本には約４００種類あり、その90％が沖縄の海に生息している。宝石にも負けない美しさや「魔除け」と見なされたことから、宝飾品として珍重されてきた。固い骨格を持たないソフトコーラルは、ワシントン条約で採取が規制されている。

―実際にアクアラングを背負って、始めて海に潜ったのは？

「二十歳のときでした。体験ダイビングでしたが、無重力の世界にいるような水中独特の浮遊感を味わって、『これだ』って思いましたね。すぐに潜水士の免状を取って、それからインストラクターの資格を取って。ともかく水の中にいたかった。このころは、スポーツとしてスキューバを楽しむ人も少

愛機を構える澤谷さんは少林寺拳法の師範でもあるそう

置・レギュレーターが開発され、日本には戦後間もなくアクア・ラングという商品名で入ってきた。１９８０年代のマリンレジャーブームに乗って、スキューバダイビングが人気を呼んだ。年に1回以上楽しんだことのある人は約３００万人という推計がある。

―確かに、潜ってみなければ知り得ない、陸上にいては想像もつかない世界があるんでしょうね。

「魅力の第一は浮遊感。それに、実にさまざまな生き物たちと出会える楽しみ。陸上の野生動物に比べると、侵入者である私たち人間との間で保とうとする距離がずっと近いんです。もちろん、ジョーズのホオジロザメのような危険な動物もいないわけではありませんが、私たちが潜る世界では基本的に平和が保たれているんです。だからこそ、潜った瞬間から陸の上のストレスやいやなことも忘れ、非常にピュアな時間を過ごすことができます。このことがダイバーを惹き付ける最大の理由かも知れませんね」

世界のダイバー沖縄を高く評価

―最近では若者を中心に随分多くの日本人が海外に出かけて潜っているそうですね。

「国際テロの多発で行きにくくなっている所もありますが、日本とは違った海を楽しめますから。毎年1回はダイビングスクールの教え子らと出かけ、先日、ニューカレドニアから戻ったばかりです」

―天国に一番近い島。海底にももう一つの天国がある。

「世界有数のニッケル生産国で豊かなためか、島の人はとてもゆったりと暮らしています。子供は一日中、海で遊び、素晴らしいダイビングポイントがたくさんあります。でも、外国にばかり目が向きがちですが、実は、モルジブやカリブ海と並んで沖縄に、世界のダイバーが高い評価を与えているんですよ」

■クリオネ　「流氷の天使」「氷の妖精」の愛称そのままに海中に漂う。ギリシャ神話の海の女神「クレイオ」に由来し、「ハダカカメガイ」の和名を持つ巻き貝の一種。体長１～３cmで流氷とともに北海道のオホーツク沿岸にやって来る。流氷ダイバー憧れの存在。

なく、漁業をやってる人から『潜れるなら手伝ってくれ』と頼まれて、定置網の設置や補修作業などをやったりもしました」

―北海道の沿岸では栽培漁業が盛んになってきた時期で、潜水作業の需要も多くなったようですね。どのくらいの深さまで潜るんですか？

「一般的な装備だと40メートル、つまり5気圧ぐらいまでが限界とされているんですが、知床の海では60メートル近くまで。それ以上はとても危険ですから、自分で一線を引くんです」

海底に咲き誇るオオイソバナ

ピュアな時間と浮遊感と

―ロバート・デ・ニーロ主演の映画「ザ・ダイバー」では、危険や限界にチャレンジする潜水士が勇者として描かれていますね。

「ボードに載って真っ直ぐ海中に降りていく潜水訓練では、60メートルあたりから恐怖心に捕らわれる人が出てきます。差し迫った具体的な危険があるわけでないんですが、太陽の光が届くのは40メートルほどまで。濃いブルーの筒に閉じこめられたような、中にはタイムマシーンで時空を飛んでいるようと表現する人もいますが、その独特の閉塞感が精神状態を揺さぶるんですね」

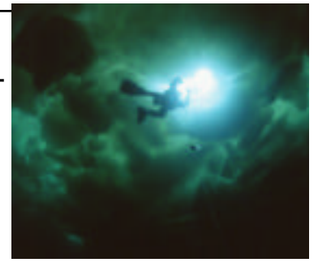
―今はスポーツとしてのダイビングが盛んですが、そんなお話を聞くと、私にはとてもできない。

「まあ、スポーツとして楽しむ分には、正しい知識と技術を身に付け、ルールとマナーをきちんと守れば、問題はありません。地上とは全く世界が違う異次元が、そこにあるんですから」

■スポーツダイビング　１９４３年、タンク内の高圧空気を通常呼吸している空気の圧力まで下げる装

■澤谷信康（さわや・のぶやす）さん　1938年、札幌市生まれ。1977年、NHK特集「日本の自然・知床の海」で水中シーン撮影を担当。1983年、「マリンダイビング」誌第13回水中写真コンテストでグランプリ受賞。札幌でダイバーハウス「シードラゴン」を経営する傍ら、野生動物や水中写真などを撮り続けている。著書に、写真集「カラフトマス生命の旅・知床」（北海道新聞社刊）がある。

本書を読者2名にプレゼント。応募はアクアプラネット研究会（電話011-761-6039）へ。


雲のように広がる流氷原の下を行くダイバー

珊瑚礁にも温暖化の危機

―沖縄の慶良間とかですか？

「ええ、慶良間の若いサンゴ礁一帯の美しさは、ほかにないのでは。各国を回っているアメリカ人ダイバーと話す機会があって、慶良間の座間味と石垣島北部が世界一ではないかということで意見が一致したこともあります。ちょっと横道にそれますが、水中では手話のような会話法があって、これは万国共通。その延長線上で、国籍を問わず、誰もがすぐに友達になれるのもダイビングの素晴らしいところなんですよ。で、沖縄の海なんですが、なんといっても透明度が高く、洞窟など海底も変化に富んでいます。魚の種類、数もすごく、巨大なマンタ（オニイトマキエイ）が悠然と泳ぐ姿は圧巻です」

―その座間味では、ダイバーがサンゴ礁を傷付けるケースがあるとも聞きます。また、海の汚染・環境悪化は世界的に深刻化しているそうですが、海中でそんな変化を実感することはありますか？

「ダイバーの問題は、技術の未熟さや知識不足、マナーの低さからくるものです。例えば水中でヘリコプターのホバリングのように身体を静止する技術を身に付けたり、サンゴの生態などの知識が豊かになれば、それだけ水中での楽しみが増すと同時に、自然に負荷をかけずにすむわけです。世界的な環境悪化という点では、温暖化の問題が本当に深刻です」

―温暖化の影響とは具体的に。

「海水温の上昇は、サンゴの白化現象という形で表れます。私はオーストラリアのサンゴ礁で出会ってますし、今は少し収まってますが、沖縄でも一時見られましたね」

■白化現象　サンゴと共生関係にある植物プランクトンの褐虫藻（かっちゅうそう）が水温上昇などが原因でサンゴから離れるために、骨に当たる部分が白く見える。さらに栄養が補給されないため、真っ白になって死滅する。

―ふだんは非常に美しいものだから、余計に目に付くのでしょうね。考えてみると、温暖化、温暖化と騒いでいるが、私たちが身近にそれを感じる場面というのはそうありませんよね。澤谷さんがいうように、特別の世界だから、水中に潜るから、肌に感じることができるんでしょうね。

「確かに、水というか、海は変化に敏感だと思います。知床と同じようにかつては『秘境』と呼ばれた積丹半島に、ぐるり一周する道路が整備されると、海の透明度がどんどんなくなっていった。日本海に注ぐ尻別川のヤツメウナギは、護岸工事で『すみか』を狭められ、鉛筆のように細いものしか見かけなくなっています。開発も確かに必要なことですが、土手の部分も残すなど工夫はいろいろあると思うのですが」

―世界遺産への登録を求めている知床は、大丈夫でしょうか？

「知床の海の栄養は、流氷が運んできます。アイスアルジと呼ばれるケイ藻などのプランクトンが海中にたくさん浮遊しているのですが、元々は極東のアムール川が栄養源になっているのです。ところが、温暖化などの影響で知床沖にやってくる流氷が減ったり、流氷が海を埋める期間が短くなり、結果的に栄養分が減るという現象が起きてきています」

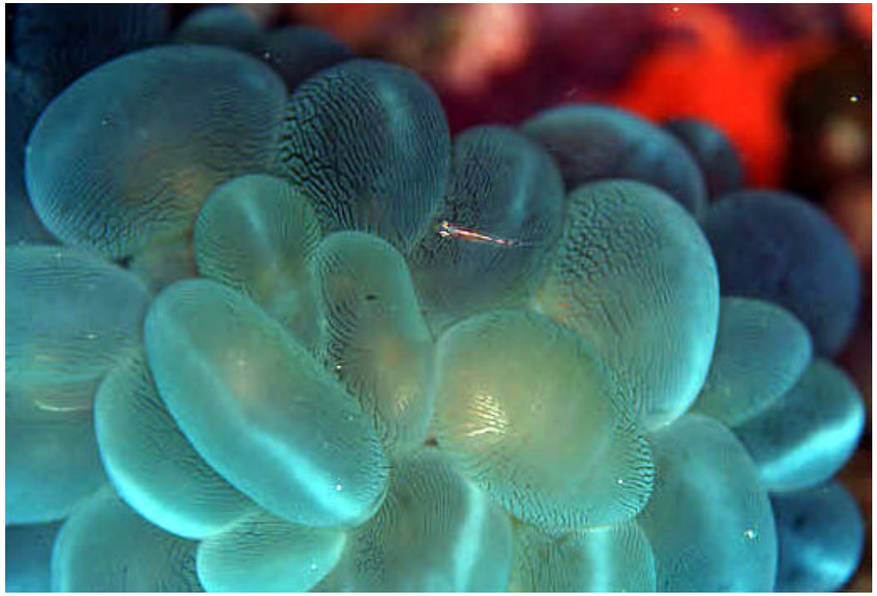
―『豊かな森が、豊かな海を育てる』という自然のリズムが狂い始めている。

「知床周辺の川についても同じことがいえます。アメマスやサクラマス、カラフトマスなど海から川を目指す魚が、これまでは遡上する時期や産卵場所などをうまく棲み分けていたのが、少しづつ崩れてきているんです。マスを狙う熊も含めて、食物連鎖に狂いが生じ、自然に営まれていた循環の輪が切れかかっていることが、やがて人間にも影響を及ぼすようになるのでは。ちょっと気懸かりですね」

■知床（しれとこ）と世界遺産　政府は２００４年1月、海域7千４００ヘクタールを含む5万６１００ヘクタールについて世界遺産登録の推薦書を提出。２００５年６月開催の第29回世界遺産委員会で決定される見込みだ。

鮮やかな黄色い魚体がニューカレドニアのマリンブルーに映えるヨスジフエダイの群れ

（特集の写真提供：シードラゴン/澤谷信康さん）



「幽玄の宇宙」守り続けたい

―都会で一見便利な生活をしている者には、なかなか実感できないことですね。流氷原でのダイビングツアーが最近、注目されていますが、これも一種の極限の世界では。

「水温はマイナス1・8度。そう聞けば、案外たいしたことないと思うでしょう。でも、百度のサウナには入れても、百度のお風呂には入れないと同じように、熱の伝導率の関係でとてもサムイ・ツメタイ。ダイビング・スーツは良い物が開発されてますが、出すのは目の部分だけで、手には三本指のグラブをはめます。氷に穴を開けてドボンと入るだけですから、これは楽ですが、命綱を付けないと、出口の穴を見失ってしまいます」

―やっぱり、恐そうですね。

「流氷の海でのダイビングは、熱帯の海では味わえない魅力があります。水中から見上げると、流氷の雲間から太陽の光がほのかに漏れてくる。クリオネが天使のように小さな翼で舞い、それはそれは、まるで幽玄の宇宙にいるようですよ。この体験をするとますます、この私たちの宇宙を、なんとか子や孫の世代へと引き継いでいかなければ、と思います」

―フリーダイビングの世界を描いた映画『グラン・ブルー』のモデルとなったジャック・マイヨールは、水中で恐怖を感じるのは『地上に戻る理由が見つけられなくなるから』といったそうですね。でも、澤谷さんのお話をうかがって、ダイバーには異次元の素晴らしさと同時に、地球が発するシグナルを地上の私たちに伝えるメッセンジャーとしての役割もあるように感じました。これからも水中からたくさんの情報を発信してください。

（聞き手・梶田博昭）

SinemaScope SinemaScope SinemaScope SinemaScope Sinema

海はドラマティック

深海生物研究所の元海軍ダイバーが大活躍する**「潜水王マイク・ネルソン」**（原題Sea Hunt）は、1957年から1961年まで米国でテレビ放送された人気シリーズ。日本では1958年から放映され、やはり大ヒット。主演のロイド・ブリッジスは、映画「海底世界一周」「海底大脱走」など潜水物のほか「真昼の決闘」にも出演している。水中の格闘でレギュレーターのホースをナイフで切り裂くシーンは、映画**「007 サンダーボール作戦」**（1966年・米）にも受け継がれた。

水中撮影を主体としたドキュメンタリー・タッチの映画は、イタリアの独壇場だ。紅海の海底探査を記録した**「青い大陸」**（Sesto Continente、1954 年）は、当時としては最先端の総天然色映像で異次元の魅力を余すことなく伝えた。フォルコ・クイリチ監督は、少年と鮫の友情を描いた**「チコと鮫」**（Ti-Koyo e il suo pescecane、1962年）で環境破壊問題もクローズアップした。

「チコと鮫」は1981年、**「少年と鮫」**（BEYOND THE REEF）のタイトルでリメークされている。成長したチコと真珠商の娘とのラブストーリーに仕立てられているが、タヒチのボラボラ島で撮影した透明感の高いラグーン（環礁内の浅瀬）と、無数の魚の姿が美しい。

「青い大陸」を製作したブルーノ・ヴァイラーティは、**「シャーク！」**（Sharks and Men、1976年・日伊合作）を監督し、やはりドキュメンタリーの手法で世界各地の海に鮫の生態を追った。シチリア島沖で繰り広げられるマグロ漁のシーンが壮大。

リュック・ベッソン監督で個性派俳優ジャン・レノが主演した**「グラン・ブルー」**（LE GRAND BLEU、1988年・仏）は、素潜りによる到達深度を競う「フリー・ダイビング」の世界を描いた異色作。実在のフランス人ダイバー、ジャック・マイヨールをモデルに、荘厳な海に魅せられた男たちの姿が感動的だ。

宇宙服や中世の甲冑を連想させる潜水具が登場する**「ザ・ダイバー」**（Men of Honor、2000年・米）は、アメリカ海軍で黒人として初めて「マイスター・ダイバー」となった伝説の男が栄光を手にするまでの苦難の道のりを描いた作品。過酷な潜水訓練がリアルで、教官役のロバート・デ・ニーロが渋い。

「グラン・ブルー」「ザ・ダイバー」は、20世紀フォックスホームエンターテイメントからDVDが発売されている。

オホーツク海に沈む夕日を背に知床に還ってきたサクラマス

北海道の東に位置する小さな半島。今、その知床半島が世界遺産になろうとしている。人間が自分たちの利益のみを追求し手を加えすぎた知床の川を、少しでも早く本来のあるべき姿に戻し、多くの生き物たちが滅びることのないよう一人ひとり何ができるかを考えたい。空き缶やたばこのポイ捨てといった些細な行動から意識を変えていくべきではないだろうか。

地球がつくり出した素晴らしい自然の意義と、人間がつくり出した地球の危機を子どもたちに伝え、本当の意味での財産を次世代に残せるよう心から願う。

（澤谷信康「カラフトマス生命の旅・知床」より）